

自由研究発表

インドネシアにおける統合装置としてのブンチャック・シラットの変容 — 武術の競技会から発表会へ —

From martial arts competition to presentation

: The transformation of Pencak Silat as an integrative framework in Indonesia

今村 宏之 (国立民族学博物館・外来研究員)

IMAMURA Hiroyuki (National Museum of Ethnology,
Visiting Researcher)

東南アジアでは祝祭での芸能や神秘実践とかかわる種々雑多な武術が散見される。秘匿的に伝承されるものもあれば、地域や民族を越えて伝わる技法もある。華人や西洋人、日本人との交流の影響が見て取れるものもある。インドネシアでは独立の前後から、原初的と見立てられた国民国家に根づく単一の武術があると見なされ、諸武術はその創られた上位概念の下位分類とされた。中央政府は、その上位概念のもと、諸流派組織が参加可能な近代スポーツの形態が創出されることを支援した。国民統合に役立つことを期待していたからであった。この上位概念とはブンチャック・シラットのことである。

本発表では、ブンチャック・シラットが2000年頃に近代スポーツ化を確立した反動で出現した「伝統」派を自称する人びとに焦点を当てる。彼らはブンチャック・シラットを名乗る必要がなかったにもかかわらず、ブンチャック・シラット・トラディシ(tradisi 伝統)の担い手を自称した。「近代スポーツ化がとりこぼした芸術・文化の側面を補強する」ことを題目に、地方分権・民主化期にあってもブンチャック・シラットの一部で居続けることを選んだ。

自称「伝統」派は勝ち負け以外の形でブンチャック・シラットをインドネシア社会に提示する手法を模索した。そのうちのひとつが約2,000~8,000人、約20~60流派のシラット愛好者が参加するパレードであった。任意団体の社団タントウガン・プロジェクトがパレードを企画し、ジョグジャカルタのマリオボロ通りで2012~19年に計6回実施した。

本発表では、計3回のパレードの参与観察と運行統括者への聞き取りをもとに、いかにしてしがらみのある諸流派組織を一つの総体であるように社団が見せたかを検討する。唯一の頂点を決めないという社団のやり方を検討することで、統合装置として機能し続けるブンチャック・シラットに生じた変化が明らかになる。